どこからの引用なのか，それは伴七の言葉なのか，触れや文書の写しなのか，あるいは他者の言葉なのか，必要な部分だけがピックアップされていて，筆者にとって必要な史料だけの羅列となっており，文書の全体像が見えてこない．さらには唐突に出てくる大間々町礪波秀斎とはだれなのか，あるいは「於出島千八百五十八年七月十三日」はポンペが長崎奉行所に提出した上申書と書かれ写真も掲載しているが，これは小見出しの「暴瀉病流行并治法」なのか，「安政記聞」内にそのまま掲載されてる史料なのか，それとも他からの引用なのかといった記述もない．専門書ではなくわかりやすい内容でという意図も汲み取れるが，だからこそ余計に基礎的なデータの挿入や史料そのものの解説・検討は大事であろう．

猛威を振るうコレラに対し当時の人々が具体的に記した記録には，人々の生きていこうという力強さや後世の人々に伝えていこうという切実さが読み取れる．その記録を見つけ出し，コロナ禍の私たちの前に再登場させた筆者には崇敬の念を禁じ得ない．そのうえで評者と意見の相違がみられる以下の箇所，現代の医師の立場から本書の史料を通観して「当時の庶民は祈ることで疫病を追い払えると本当に思っていたとしか言いようがない」と述べる筆者に，評者の代弁として次の引用を最後に添えておきたい，「コレラに悩まされていた幕末の民衆にとって，神仏への祈りは人命を守るための現実的な手段の一つであり，きわめて切実な営為であった」[2]．

1）宮間純一．地方文書からひもとく安政のコレラ．地方史研究協議会編．日本の歴史を原点から探る．東京：文学通信；p137–146など
2）1）と同じ；p145

（木下　　浩）

［みやま文庫，〒371-0017 群馬県前橋市日吉町1丁目9番地1号 群馬県立図書館4階，TEL. 027（232）4241，2021年10月，B6判，194頁，1,500円（みやま文庫会員価格：1,000円）］

洋学史学会 監修
青木歳幸，梅原　亮，沓澤宣賢，佐藤賢一，
イサベル・田中・ファンダーレン，松方冬子 編
『洋学史研究事典』

現在，洋学という学問領域を研究領域としている人は少ないと考えられる．しかし洋学史は，日本の現在の学術の源流として史学の中で決して小さいものではないと思う．

1984年に日蘭学会を編者として沼田次郎・石山洋・梅渓昇・大森實・片桐一男・酒井シヅ・矢部一郎の諸氏を編集委員として『洋学史事典』が雄松堂出版から刊行されて38年を経た．

2021年，洋学史学会の監修により，青木歳幸/梅原亮/沓澤宣賢/佐藤賢一/イサベル・田中・ファンダーレン/松方冬子を編者として『洋学史研究事典』が思文閣出版により刊行された．日本の現在における諸学の西洋からの導入をヒト・モノ・ナガレとして調べる必要になった時に，いままで頼ることの多かった『洋学史事典』に加えて，その後の史的研究の成果が事典の形で刊行されたことの意義は大変に大きい．

本事典は吉田忠による総論「洋学史研究試探」，「研究篇」I. 洋学の社会的基盤　II. 支えた人びと　III. 影響を与えたモノ　IV. 普及した書物　V. 研究教育の場　VI. 近世学芸から近代学芸へ，としての181項目，「地域篇」47都道府県すべてを網羅する196項目よりなる．執筆者は221名に上る．また付録として13頁にわたる「洋学関係資料所在目録」が巻末にある．吉田忠の総論にも編集委委員長の青木歳幸のあとがきでも述べられていることであるが，2001年から2004年に渡った文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「我が国

の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」（略称「江戸モノづくり」）の研究成果は決して少ないものではなかったはずであるが，それがひろく共有されているとは言えなかった．その一部が本書のような中項目事典として出版されたことは，時は過ぎたが大きな成果であろう．その研究期間に比べると，現在の世界，日本の研究環境は大きく変化しているといわざるを得ない．吉田忠が総論に『デジタル時代の洋学史研究として，PC のみを頼りに研究する安楽椅子歴史家の出現も遠からずあろうが，個人の研究も当該分野の永年にわたる研究成果の積み重ねの上にある．われわれはまだ過渡期にあるが，デジタル時代の歴史学研究の技法と作法の開発が求められている．（部分引用）』と述べており，本事典の内容はその方向性を持って編まれたと考える．

「研究篇」の内容は前記した大項目にあるように取り纏められているが，西洋との交流における政治，経済，社会の歴史をヒト，モノ，書物，教育，学芸学術に分けている．181 中項目の内容を詳しく紹介は出来ないが，一般の読者も研究者もその必要とする事項の今日までの研究の到達点を知ることに充分な内容となっている．それに加えてそれぞれの領域の研究の今後に残された問題提起がされている項目も多く，また各項目に《参考文献》が加えられていることも事典の体裁をとりながら研究論文を読んでいる趣のあるものになっている．執筆者，編集委員，編集協力者，編集出版社の COVID19 のパンンデミック下での出版の努力に敬意を払うものです．

また，「地域篇」196 中項目が 47 都道府県を網羅していることにも編集者の気概を感じる．洋学が日本に至ってからの受容には地域における濃淡が著しいことは広く理解されている．江戸時代の幕藩体制の中で，それぞれの藩（地域）に於いて藩校や私塾の洋学に対する取り組みは，幕府のいわゆる鎖国制度の中で大きく異なったことが，その後の明治維新，明治時代に大きな人的，社会的影響をきたしたと考えられる．編集委員会が 47 都道府県すべてに項目をつくり，稿を得られたことは幸いであった．いま殊更に洋学を論ずる研究者は多いものではないし，戊辰戦争や太平洋戦争の国土の惨禍により失われてしまった地方史資料も少ないものではなかろう．洋学が怒涛のように日本に入ってきた開国後の江戸末期から明治初期の地方史が日本史学の中で，比較的研究の少ない領域のように思われるが，本事典の記載が研究者の論文に近い形をとっていることから読み応えのあるものとなっている．洋学史研究のすそ野は広いと考える．

東京に図書室を備えて存在した日蘭学会は今日もう存在しない．しかしその残した『洋学史事典』は現在でも極めて貴重な事典である．『洋学史事典』は沼田次郎による「洋学史概説」に続いて本文は上限 1541 年から下限 1882 年ごろとした小項目主義の事典であり，約 3000 項目を収録している．加えて洋学史年表と付表（長崎奉行一覧・来航船数一覧・歴代オランダ商館長と在留医師・阿蘭陀通詞一覧・主要蘭学塾門人名簿・欧文人名地名和漢音訳例対照表）を含む大冊である．沼田次郎は概説において実学としての江戸時代の洋学導入の有用性を論じ，『概して明治時代に新しく導入された科学・技術は新しい輸入であり移植であって，必ずしも洋学時代の科学・技術の延長であり発展であった，とは言えないものがある．多くの場合，洋学時代の科学・技術の延長と明治以降輸入された科学・技術の間にはある種の断層にも似たズレがあり，洋学の延長発展の上に明治以降の科学・技術があったとは必ずしも言えないものがある．それは「人」についてみてもはっきりわかることである．（部分引用）』としている．洋学導入における科学・技術への偏向が日本の近代の問題であったことは，医史学の領域でも，日本医史学会理事長を務めた山崎佐などが強く主張していたことである．日本の医史学の根の一つが蘭学・洋学であることに異を唱えるものはいないと考えるが，山崎佐は 1942 年の第 11 回日本医学会総会の総会講演『日本医道と医学及び外教（仏教，儒教，基教）との関係』の中で，『近世以降の洋医術の導入においては，切支丹の宗教精神にふれることを恐れ，方義のみを学んだ．（部分引用）』と批判的であり，『明治初期の政治において医制を

うたいながら，昨今の医道は荒廃してしまった.（部分引用）』としていた.

『洋学史研究事典』はこのズレの部分も，明治初期の問題をも採りあげており，今後の研究の一里程となると考える．蘭学・洋学の括りが，日本の学術分野で次第に相対的に小さいものになってきたことは残念であるが否定できない．今般の『洋学史研究事典』は研究の成果の上に今後の方向性と問題提起を行っている．貴重な事典が出版されたことを慶びたい.

（渡部　幹夫）

［思文閣出版，〒605-0089 京都市東山区元町355，TEL. 075（533）6860，2021年9月，B5判，516頁，13,000円＋税］

公益社団法人 日本麻酔科学会 編
『麻酔博物館設立10周年記念』

21世紀になってから，日本麻酔科学会の会員から「麻酔科学に関する歴史的資料を保管，展示する資料館または博物館を作るべきだ」という声と，学会執行部の「日本の麻酔科学の発展の軌跡を物語る器具や文献類が，時の経過とともに散逸してしまう」という危惧により，麻酔科をはじめとする医学・医療の発展に貢献してきた先達の功績をたたえ，後世に受け継ぐ資料を収蔵し公開する施設を設立する機運が高まり，2009年8月に「麻酔資料館」が設立された．日本麻酔科学会は2011年に公益財団法人化されたために，「麻酔資料館」も社会に開かれた一般の来館者に向けたメッセージを発信する必要が生じ，展示内容の充実・拡大が行われ「麻酔博物館」として2011年に新しく設立された.

この「麻酔博物館」が開館してから10年となる2021年に一般の方にもわかりやすく，さらに充実した博物館を目指して改修工事を行い，再開館した．このことを記念し作成されたのがこの冊子「麻酔博物館設立10周年記念」である．表紙・裏表紙＋52ページの小冊子ではあるが内容は充実しており，このように多くの画像を収録した日本の麻酔科学史に関する書物は初めてではないだろうか.

本書の内容は以下のようになっている.

第1章　麻酔博物館の概要と日本麻酔科学会の沿革
1. 日本麻酔科学会「麻酔博物館」
2. 公益財団法人日本麻酔科学会沿革

第2章　麻酔博物館の展示構成

第3章　麻酔博物館コーナー展示
1. 華岡青洲のコレクション
2. モートンのエーテル吸入器
3. 日本初麻酔器
4. 吸入麻酔薬「セボフルラン」の開発
5.「パルスオキシメータ」の発明
6. ラリンジアルマスクエアウェイ（LMA）の開発
7. 日本の麻酔先駆者：山村秀夫・天野道之助

第4章　手術室の変遷
1. 手術室展示の概要
2. 1960年代の手術室
3. 2000年代の手術室

第5章　麻酔法の進歩
1. はじめに
2. 麻酔器
3. 吸入麻酔薬と気化器
4. 気管チューブと喉頭鏡
5. モニター
6. 最新の麻酔薬

参考：麻酔科学史年表

以上の項目を見ただけでも麻酔科医の心は浮き立ってしまう．麻酔が発明されてから，現在の安全性の高い麻酔法に行きつくまでのマイルストーンである事項が数多く並んでいる．日本中の麻酔科医が知っている華岡青洲や世界中の麻酔科医が